

来し方を顧みて

松村蓬盟

来し方を顧みて

松村蓬盟

それは、深夜の国鉄名古屋駅プラットホーム。昭和二一年一月三十一日のこと。師匠河村蘆月師に連れられて東京の山口四郎先生にご指導を受けるため上京する途次であった。奈良から関西線名古屋乗り継ぎで東京行き二三等急行夜行列車を待つていた。

先生は四郎作延べ管をケースに入れ、佐々木小次郎張りに袈裟懸けにして居られた。寒さに足踏みをしながら。

やがて入って来た列車の窓ガラスは大部分が板張りで真ん中に二十センチ角ほどの申しわけ程度のガラスが嵌められていた。翌二月一日朝の東京は雪。知人宅に一旦落ち着いてその日の午前代々木の山口先生宅へ雪道を踏んで参上。既に河村先生はお越しになっていた。

髭を生やした大きな四郎先生。奥様を交えて河村先生と掘り炬燵を囲んでのお話を拝聴して緊張のひとつとき。先生はお茶が大変お好きで飲むほどに注いで下さる。尿意を催しトイレを申し出るのが羞ずかしく限界まで辛抱したこと。はじめに茶湯頭を吹いて下さった。自分の音が全然聞こえず先生の音ばかり、いつ息を継いでおられるのか、いつも音が鳴っている感じ、その音の揺り籠に乗せられて気持ちよく吹かせていただいた。何よりも前半のヒ（こ）チレという音節の綺麗なこと、何とも言われない感興に襲われた。後年五郎先生の音に触れ成るほどと同じ感を感じたこと、今に思います。この日から五日間続いてお稽古に参上した。松竹梅を見ていただいて中伝のお許しを頂く。十七歳。

昭和十九年(1944)十五歳 山口四郎門人河村蘆月師に師事。中学生の学徒動員で昼間は工場で働き、帰りに師匠宅に伺い、朝お袋が作ってくれた弁当を持参、お茶を頂いて食べて

からお稽古をしていただく。その頃、若い人は戦地に出て少なく門人は私一人。二日に一度の稽古。終戦の二日後八月十七日の昼、稽古に上がると「松村君、今日は音を出すのは控えよう。そのかわりに尺八の歴史の話をしよう。」と言われ、中国からの伝来、虚竹禅師、古伝三曲および虚無僧とロマンあふれるお話を先生自らメモを書いて順次時代を下って現在に至る過程を論じて下さった。

昭和二十七年(1952) 河村師が奈良県を離れ山梨県大月市に住まいを移されたのを機に主宰されてきた竹盟社竹鈴会を引き継ぐ。

昭和二十七年大阪市に教授所を開設。その頃の門下は大部分年上で、河村先生に師事されていた方が多く居られた。

河村先生は、昭和二三年、二五年および二七年に竹盟社社長山口四郎先生をお招きして奈良に於いて演奏会を開催された。四郎先生の「残月、ゆき」を生山之子、藤本純代師の三絃でお聴きし、今に耳の底に残って糧とさせていただいている。

河村先生が奈良を離れた後、戦前から存在した「大阪琴古会」という月例会奏会に既知の紹介で参加させていただく。山辺武彦、甲斐碧童、浜沖氏らの琴古流各会派の面々。小生より二〇歳から五〇歳年上の方達で、若輩者をよく可愛がって下さった。絃方は、京都の生山之子先生(九州系地歌笹尾竹之一高弟)とご門下ほかで、時折り東京から福田栄香先生ご一門、銀明会阿部桂子先生らがお越しになったことを考えると随分高級な贅沢な集まりであつたと思う。想い出すのは京都南禅寺付近の旧山県有朋別荘「無隣庵」で福田栄香先生をお迎えして例会が開催され、小生は茶音頭を福田先生にお願ひした事を宝としています。また、阿部桂子先生を京都東山の西方寺にお招きし、生山之子先生三絃との見事なお琴の

演奏は今も脳裏に残っている。

もう一つ神戸の「千鳥会」にも参加させていただく。琴古流山崎竹穂師が美也夫人と月例会奏会を主宰され、尺八は流派を問わず琴古、都山、上田の方々が楽しく相集い、時折り東京から神如道、川瀬順輔（先代）師などがお顔を見せられ、垣根をこえた交流は山崎竹穂先生のお人柄があつてのことと貴重な勉強をさせていただく。年に一度の公開演奏会が神戸で開催され、藤井久仁江先生もご出演になつたこともある。

東京における演奏会初出演は、昭和三二年五月十九日、竹盟社臯月会主催、司会山口五郎「臯月会演奏大会」会場一ツ橋講堂であつた。

四郎先生から五郎先生が臯月会会主を継承された記念すべき会であつた。絃方は、阿部桂子、井上道子、楯久雪子、矢木敬二、佐藤親貴、今村多計子、富樫教子、藤田節子および山田流高橋榮清、中田博之、岸辺美千賀、鈴木清寿、中沢君栄、堀松敬、安蒜博佳の諸先生。

四郎先生は一部終曲「雨夜の月」高橋榮清、鈴木清寿、三絃中田博之。五郎先生は二部終曲「楓の花」を矢木敬二。後の五郎先生の奥さんである岡田保子さんも俊寛と桜狩に出演されていたのをそのプログラムを今繕ひてはじめて発見。小生は「玉の台」を三絃阿部桂子、箏楯久雪子両先生により出演。その会で初めて会つた若い尺八出演者に取り囲まれ賞賛を受けたことは場違いに立たされたようで困惑したこと。奈良の山出しの自分を感じた。これも大阪琴古会、千鳥会での多くの方々のお陰と感謝の念を深くしたものであつた。

この昭和二〇年代後半から三〇年代にかけての勉強は、当代の素晴らしい名人の方々に接することができたこと。そして小規模ながらわが稽古場を持ち門下と共に研鑽できたこと。そう度々上京して四郎先生の指導を受けられないジレンマをどうすることも出来ず、悶々と

師の竹音を想い浮かべ追い求めたこと。五郎師の成長と天分豊かな音と雰囲気への憧憬と嫉妬心に苛むこともあった。

昭和三五年NHKの委嘱作品山口五郎作曲「秋に寄す」が流れた。その音は、尺八の概念を根底から覆す新しい提示であった。ふくよかな、ふつくらとして、しかも力強いがそれを前面に出さない、ひとつの音楽がそこにあった。

「もしもし、松村さん、五郎がね、どうしても貴方にといいの。」と五郎先生のお母さんからの電話。NHKラジオ邦楽演奏会山口五郎作曲「月海」の収録のお話。パートは低音部二尺三寸管。待てよ、これは困った第一、二尺三寸は指の短い小生には無理。上京して収録前日初めて楽譜を見て困ったことになった。五郎先生は二尺一寸管を都合して下さり移調して漸く収録にこぎ着けた。箏は米川敏子先生。五郎先生のお母さんにはよくしていただきました。二一年に初めて上がった折りのことをよく憶えていただき、「学生服を着て松竹梅を吹かれたのよ。」と小生を紹介するときにはよく言われたものである。この収録はお母さんの推薦が強力であったのかも知れないと密かに思ったものである。昭和三八年であった。

その年秋、四郎先生ご逝去。「どうして強く吹くんのだ。」とよく叱られたものだ。此方は負けまいとして力む。「大阪はよい所だ。」大正時代竹盟社創設期にお住みになった大阪を思い出しておられたのだろう。そのお言葉を聞いたたびに、「ようし、大阪でやるぞ。」と心に刻んだものだった。

昭和三四年だと想う。四郎先生が、稽古が終わってお話をしているとき「ようし、今からみっちゃんの所に行こう。」とわざわざ先生自ら小生を連れて井上道子先生宅に案内して下さった。飛鳥山まで都電に乗って。先方は突然の四郎先生の来訪にびっくりされ、「松村に

何か合わせてやって」とのこと。憧れの井上先生に僕だけのために機会を与えて下さった。お心に嬉しさ一杯でひとときが過ぎた。

もう先生は居られないのか。西方から心に大きな穴を感じながら寂しく思っただけのものだった。その翌年、竹盟社の先輩に混じって「三谷管垣」のNHK放送に出演した。その折りもお母さんから電話を頂き、「演奏者の紹介で竹号があつた方がよいと出る人が云うもので盟を付けることになったのよ。松村さんは何になさる。」とのこと。正直言つて本名がよいと「一郎」に誇りを感じていたのだが、気の弱い小生は流されて河村先生から頂いた「蓬月」のよもぎをとつて「蓬盟」とした。「よもぎは、野山に自生して、草餅や漢方薬になり目立たないが大変人の役に立つ植物である。君もそのような尺八吹きになりなさい。」と名を頂いたとき河村先生から諭されたもの。関西ではしばらく「一郎」を通した。

昭和四二年十月一五日竹盟社奈良支部琴古流尺八演奏会を大阪心齋橋日立ホールで開催。門下生が成長して漸く自前の演奏会を開くことが出来た。大阪にて稽古場を持つて十五年後である。絃方は京都の生山之子先生と神戸の山崎美也先生ご一門。小生は、三絃生山之子、結城怜子、木村美千代、中代とし子、箏は法心静江の方々で萩の露を終曲に。

昭和四五年ごろビクターから山口五郎「尺八の神髓」シリーズLPレコードが出た。その中で本手替手合奏曲数曲に出させていただく。当時まだ五郎先生子飼いの門下が未成長だったこともあり、この栄に浴した。

昭和五〇年十月四日大阪朝日生命ホールにおいて、第一回竹盟社竹鈴会琴古流尺八演奏会を開催。はじめて竹盟社宗家山口五郎先生のご出演を仰ぎこの回を第一回と定める。

全二七曲。終曲「残月」尺八山口五郎 三絃生山之子、佐々川静枝 箏白井親井

その前の曲「さごろも」尺八松村蓬盟 三絃生山之子、結城怜子
本曲「鹿の遠音」山口五郎、松村蓬盟 この演奏の成果により大阪文化祭賞を五郎先生受賞、
小生もご相伴に与かる。

第二回昭和五三年五月二七日大阪郵便貯金会館（二八曲） 第三回昭和五五年五月三十一日
大阪郵便貯金会館（三一曲） 第四回昭和六一年三月二日大阪郵便貯金会館（三一曲）

第五回昭和六三年三月一三日大阪郵便貯金会館（三二曲） 第六回平成四年四月二十五日

大阪メルパルクホール（三四曲） 第七回平成六年五月二十八日大阪メルパルクホール（三五曲）

第八回平成八年五月二十六日大阪メルパルクホール（三四曲）

第九回平成十年五月二十四日大阪メルパルクホール（三三曲） この会が五郎先生の最後の

ご出演となった。「山口五郎師を偲びて」と冠記して第十回平成十二年六月四日大阪メルパ

ルクホール（三〇曲）。第十一回平成十四年九月二十二日大阪メルパルクホール（三一曲）

第十二回平成十六年六月二十七日大阪メルパルクホール（二八曲）で開催。二十九年の軌跡

である。

その間、重要無形文化財保持者諸先生の出演は菊原初子、中田博之、米川敏子、藤井久仁江
および山口五郎の諸先生の出演を仰ぐ。

ここまでよく勉強してくれた。門下一同に感謝。小生がこれまで続けられたのはそれらの
勉強心を与えてくれたものと思う。毎週稽古に通ってくれる。その勉強の心あつてはじめて
回を重ねることが出来た。

この演奏会は、原則単管である。曲は会主小生が決める。古曲オンリーである。小生が法律
である。

構成員の高齡化は進んでいる。しかし、齡と稽古事は別物。會員のモチベーションは上々である。

わたくしは、いつも門下に云っている。演奏を褒められたときは、尺八そのものが持つ音に對してである。恰も自分が作り出した音であると思うな。本来尺八は人の心に沁み入る美しいものだ。尺八が褒められたんだ。それにあやかっただけだと。

来し方を見て近時の尺八について思うことあり。

若くして日なが尺八を吹いて過ごすことが出来る結構は世の中になつた。往時はそうではなかつた。生活のため世間の人は働いた。分に応じた暮らしをし寸暇を尺八の稽古に割いた。今の若い人たちは、素晴らしい技術を早く身につけ、上達するものが多い。演奏会、放送などの演奏に接するとそう思う。しかし、何かもの足らない。その音個性に乏しい。均一である。さらつと流れるような演奏。この人は何を出そうとしているのか。わからない。

尺八は声楽である。器楽と思うな。人の声、ことばは、歌となり心情を語る。肉声は息より生まれる。息は心を語る。わたくしが師匠からそれを学んだと思う。

悲しい時を竹盟社の者みんなが過ごした。宗家山口五郎師の先に夫人保寿美師ご他界。三年、後を追うようにして平成十一年一月三日五郎先生も鬼籍にお入りになつた。わたくしの誕生日に。わたくしは三人の師を失い見送つた。

メディアの発達著しく、残された演奏、竹音は多い。しかしそれは影の音。真の音は我々の心の中、奥深くに存在する。師の面影と共に。

平成十六年七月二十八日夜

松村蓬盟（一郎）

昭和四年一月三日奈良県奈良市に生まれる。

昭和十九年 山口四郎門人河村蘆月師に師事

昭和二十一年 河村師の推挙により山口四郎師入門

昭和二十七年 河村師主宰竹盟社竹鈴会を継承

昭和三八年 山口四郎師没後、竹盟社二代宗家山口五郎師に師事

昭和五〇年 大阪文化祭賞受賞

平成十二年 竹盟社理事長に就任

追 この文章は、社団法人日本三曲協会会報「先輩にきく」の欄への寄稿を請われ記したも

のである。（平成十六年九月十五日発行）

来し方の所感は、尺八に重きを置き、自己の人生全てに亘るものでないことをお断りいたします。

なお、その後の竹盟社竹鈴会の活動は、会員の熱き思いにより継続され、

平成十八年六月二十五日「第十三回竹盟社竹鈴会琴古流尺八演奏会」大阪メルバルクホール

平成十九年九月十六日「第五回竹盟社竹鈴会琴古流尺八勉強会」大和郡山城ホール

通年の新春初吹き会、春の合奏研究会、ゆかた会合奏研究会、納会合奏研究会および

本曲研究会を催し、会員の意気は上がっている。